

益々彼と永樂帝との對比は面白く思はれる、而も兩者角逐の大活劇の一幕は、終に開かれんとして開かれずに終わったのである。支那征伐は帖木兒畢生の目的であつた、一度ならず二度ならず機會を失つて果さなかつたのを、今漸やく深き決心と確かな成算を抱いて征途に就きながら、まだその半にも達せずして空しく病の爲に歿せねばならなかつた無念さは、實に想像に餘りがある、彼がその志の儘に二十萬精銳の軍を指圖して、永樂帝の麾下と輸贏を決したならば、亞細亞の歴史は今如何なる消息を吾等に傳へたであらうかなどの想像は、せめても此の老雄の最後を弔ふべき一片の同情であらう。

(大正元年九月稿、藝文第三年第十號)